

# 私が出った心に残るマレーシアの元日本留学生たち

## Former Malaysian Students Having Studied in Japan

### on My Mind

産経新聞客員論説委員 千野 境子

CHINO Keiko

(Guest Columnist of the Sankei Shimbun)

2014年8月、マレーシアを訪れた際にマレーシア元日本留学生協会（JAGAM）や東方政策元留学生同窓会（ALEPS）などの元日本留学生たちに会うことが出来た。本稿はその中から心に残る老若二人の元日本留学生のことを中心に書いてみたい。

#### ウンク・アジズ元マラヤ大学副学長

今年の「歌会始の儀」のお題は「人」だった。一般から選ばれた10首の1つに「<sup>ぶな</sup>樺植ゑて百年待つといふ人の百年間は楽しと思へり」というのがあって、ちょっと唐突ながら、1年半前にクアラルンプールでお会いしたマレーシアの代表的文化人であり知日家のウンク・アジズ元マラヤ大学副学長のことが懐かしく思い出された。

初対面というのに堅苦しさなど微塵も感じさせず、90代とは思えない若々しさと好奇心が一杯で、そこにいるだけで周囲を楽しくさせるような魅力にあふれた「人」だった。

1922年1月28日の生まれだから、この新年にちょうど94歳を迎えたばかり。今もかくしゃくとしてお元気に違いない。あと少しオマケすれば、まさに「百年間は楽しと思へり」人生になるのではないかと思う。

ロンドンに生まれ、英領マラヤで初・中等教育を受け、マラヤ大学で経済学を修めたウンク・アジズ氏は、第二次世界大戦中に早稲田大学で学んだ元日本留学生の大御所である。血筋を引くジョホール州のスルタン家が最後の将軍、徳川慶喜の徳川家と親しく、その縁で徳川奨学金を受けた。

同じ頃、南方特別留学生として広島文理科大学にいたのがスルタン家のサイド・オマル氏で、2人は子供の頃から親しい間柄だった。しかし連日空襲に見舞われる東京を避け帰国したウンク・アジズ氏に対して、サイド・オマル氏は「安全だから」と広島に残ったことが、明暗を分けた。

原爆のため命を落とした同氏は京都の寺に葬られ、ウンク・アジズ氏はその後サイド・オマル氏の実妹アザーさんと結婚した。娘のゼティ・アクタル・アジズさんはマレーシア中央銀行の総裁である。

2014年8月22日。都心から少し離れたクアラルンプール郊外の静かなマンションの住いを訪れると、真っ赤なポロシャツ姿のウルク・アジズ氏が笑顔で迎えてくれた。室内に豪華な調度品などは見当たらず、想像していたよりずっとシンプルな暮らしぶりに最初は少し驚いたが、話している内に飾らない人柄にはこの方がむしろ合っているみたいで好感を抱いた。

「どうぞ何でも聞いて下さい。残念ながら日本語は忘れましたがネ、さあ、どうぞ」

ウルク・アジズ氏は笑みを絶やさず、気取りがない。見るからに健康そうで、一時は足が悪く車いす生活だったというのが想像出来ないくらい。一週間に2回90分のリハビリに励む一方、毎日、せつせと散歩をした甲斐があって歩けるようになったという。玄関先には観葉植物とともに運動器具が立てかけてあり、それを使って体調維持に努めている。また先妻に先立たれたが、新しい伴侶に出会ったことも生活に張りを与えているのだろうと感じた。

日本も含めて遠出の旅をすることはなくなったが、大学で今も学生たちに教えているし、日本からの来客も多い。さらにALEPSに求められればアドバイスしたり、集いにも顔を出したりするそうで行動的、外食にもよく行き、週に一度は大好きなお寿司を食べるとか。

と言っても悠々自適の生活というのは当たらない。加えて新たな著作にも取り組んでいるのだ。マレーシアの代表的な経済学者として知られるウルク・アジズ氏は、とくに貧困と経済の問題を研究、1993年に第4回福岡アジア文化賞を受賞した際の贈賞理由には次のような下りがある。

《…同氏は、単に経済の理論的な問題ではなく、マレーシアの民族構成という国の存立にも深く関わる貧困の問題に、経済学者として正面から取り組んできた。農村・農業開発、土地制度などの領域におけるその先駆的な研究は、現在もそれぞれの研究モデルと見なされている。》(『福岡アジア文化賞の人々』連合出版から)

しかし執筆しているのは経済学の本ではないという。

「もう経済は書きません。政治の本？ 書きたくないですね」

ニコニコした表情は相変わらずだが、ウルク・アジズ氏の言葉はそれ自体が批評性を帯びているように感じられた。

では何を書いているのだろうか。

「パントンです。もう15年間、マレーのパントンに取り組んでいます。パントンは俳句とは違いますが、とても古くからあるマレーの詩です。マレーの知恵や生活、生と死、恋…非常に沢山のパントンがあり、私のコンピュータには1万6,000のパントンが入っていますよ。それらから私が1,000くらいに絞り、タイピストに打ってもらい、グループに分けて分析をしています。今、マレーシアの若い人々が読む詩はパントンではありません。俳句のように現在も生きているのではなく、パントンはオールド・ファッションになってしまっているのですね」

そのことが如何にも残念そうで、若い読者にも身近に感じて貰えるように、本の構想は「パントン

とは何か」に始まり、「若者はいかに恋をするか」という考察をまとめた章まであるそうだ。インタビューした当時、「来年2月頃までには第一稿を書き上げたい」と言っていたから、もう大詰めに差し掛かっているかもしれない。俳句はもちろん、日本とマレーシアの文化芸術に通暁するウルク・アジズ氏ならではの著作になることを期待したいものである。

執筆の合間には読書も楽しむ。目下、愛読しているのはスウェーデンの探偵ものだという。「そう、日本の探偵ものも好きですよ。何と言ったかな、大好きなのは有名な女性作家で…えーと、えーと…」

アジズ氏は立ち上がると、奥の部屋へ消えた。しばらくして戻って来ると嬉しそうに言った。「宮部みゆきだね」

こんな風に話は澆刺として、どこかユーモラスでもあったから、聞いていて飽きることがなかった。そして話題は現代の新しい貧困問題への関心から、安倍政権、イスラム原理主義過激派、感染症までグローバルに広がった。

ただ今、こうして振り返ってみると、何にもまして心に響いた話はやっぱり日本留学時代に関してだったような気がする。来日して徳川家の人々に会うと「何を勉強したいのかね」と聞かれた。「経済です」と答えると「では早稲田だなと言った。慶応とは言わなかったね」とニッコリ。実はお会いした時の挨拶で「私も早稲田ですから同窓です」と言ったので、一種のリップサービスだったのかもしれない。

9か月間、日本語を猛勉強し、夢まで日本語で見えるようになった。しかし戦雲広がり、大学も留学3年目には閉鎖され、遂に学業を続けることが出来なくなった。

「早稲田の先生たちは皆とても親切でした。だから（梅干しだけの）日の丸弁当もOK。また神田には戦争中でも本が沢山ありました。本当に幸せな日々だった。それが僕の人生」

良き師に良き留学生。困難で短い歳月だっただけに、凝縮された関係は一層得難く、今では幸せな思い出に昇華しているのだろう。またその時の猛勉強が土台となって、経済学研究に留まらない、歴史から文化、芸術に至るまでの造詣が育まれたに違いない。やがて良き留学生は母国で良き師になり、多くの人材を育て、今もその情熱を失っていない。日本へ行く留学生にはどんなアドバイスをしますかと尋ねると、答えは単純明快であった。

「Study hard！」

外国語の習得にはそれしかない。徳川留学生としての実感でもあるだろう。

「私はね、もうパブリシティ（世間の評判や宣伝）が要らない。だからとても幸せです」

なかなか言えないセリフだ。何と幸せな人生だろうか。私もそんなウルク・アジズ氏からお裾分けに預かった気分でマンションを後にしたのだった。

## サイド・プトラ ALEPS 会長

ウルク・アジズ氏がアドバイスしたり顔を出したりしている ALEPS のサイド・プトラ会長にも、昨年末に思いがけなく「再会」を果たした。と言っても、それはマハティール元首相や元日本留学生などマレーシアと日本関係者との懇親会を伝えるデジタル・ニュース「NNA・ASIA」の中でのことで、サイド・プトラ会長はこの日マ関係者を結ぶ懇親会の橋渡し役だった。

「これまでの活動や受け継いできた歴史を若い世代につなげ、経験を共有していきたい」。

懇親会でそう挨拶するサイド・プトラ氏に、あの時と志は少しも変わっていないことを頼もしく感じた。

2014年8月21日夜、仕事を終えてクアラルンプールのホテルに現れたサイド・プトラ氏は、まるで昔からの知り合い同士のように自身の留学経験に始まり東方政策や ALEPS、今後の日マ関係などについて達者な日本語で熱心に語ってくれた。

サイド・プトラ氏が東方政策留学生として来日したのは1988年。82年に当時のマハティール首相が日本と韓国の発展に学ぶ「ルック・イースト（東方）政策」を提唱し、マレー系若者たちの日本への研修・留学が始まった。すでに働いていたサイド・プトラ氏は6期生として選ばれた。

日本語を一年勉強した後、新居浜の工業高等専門学校に学び、卒業後も日本で半導体のマイクロチップを扱う企業に就職。その後、帰国し、仲間五人で会社を立ち上げ、現在は自分で会社を経営している。

もっとも現在は、ALEPS 会長としての仕事の方が忙しそう。他にも友好都市との交流事業などにボランティアとして関わる。もともと自分のやりたかったことだが、「恩返し」でもあると言う。

「僕の世代ではマレーシア人の7割は貧しかったと思う。僕の家も貧乏だったから大学を途中で辞め働いていた。田舎から出てきて一生懸命働くだけで夢とか希望なんてなかった。それが東方政策のおかげで日本へ行くことが出来た。人間としてお返ししなくてはいけないという気持ち、責任感です。留学には沢山の税金も使われているわけだし」

その時の政府の留学政策のおかげで人生は思いがけない方向へと開けていった。もし東方政策がなかったら、日本で学ぶことなど思いもよらなかったことだろう。そうしたこともあって、サイド・プトラ氏の会長としての抱負は「東方政策が成功だったことを国内でも見える形にする」ことだ。

東方政策も30周年が過ぎ、その留学・研修生は現在、約1万5千人にも上る。帰国後、彼らの多くは日系企業に就職するか起業し、やがてその大半は、サイド・プトラ氏もそうだが、中小企業の経営者になる。その意味では東方政策の元日本留学生たちは皆、それなりに成功組と言える。しかし果たしてそれだけでよいのか。またそのことは同窓生や関係者の間では周知されていることだが、マレーシア社会に彼らの活躍があまねく知られているというわけではない。会長としても個人としても、それは残念だし、もったいないと考えているのである。

「マレーシアが、ある国（外国）に学べというのは日本だけで、世界でどこにも例がない。これはスゴイこと、特別なことです。しかも国の税金を沢山使ってます。でも（マレーシアには）何てバカな政策を作ったのだ。何で（東方政策に）夢中になっているのか。莫大な金を使って成果はあったのか。こういった事を周りで言っている人も結構いるのです」

日本ではルック・イーストと言えばマハティール首相、マハティール首相と言えばルック・イーストと言われるほど両者は表裏一体のものとして知られているし、日本に一目おいてくれたことでマハティール首相のファンも少なくない。そのため日本人は東方政策がマレーシア国内でも当然、良く知られ、日本のことも評価されていると考えがちだが、必ずしもそうではないのである。

しかしこれはマレーシア側だけの責任だろうか。そうではあるまい。日本側も東方政策の恩恵を十分受けてきたはずだから、日マ関係の文脈の中でそれが本当に生かされ、蓄積されてきたか、また将来へと繋がっているか、改めて考えてみる必要があるようだ。

サイド・プトラ会長もやんわりと「日本には留学生という（日本の）味方が7千人もいるということをもっと分かってほしいですね」と言った。

東方政策の成果見える化のために、サイド・プトラ会長がALEPSとして現在、考えていることは、東方政策の歴史を文書に残すことや、自身も留学した工業高等専門学校のネットワーク作り、さらには日本留学を共通項に、絆をアジア各国に広げることなどだ。

ところで東方政策留学生の知名度がマレーシア社会でそれほど高くない理由には、これまでのところ留学・研修生から政治家をひとりも輩出していないということも関係がありそうだ。政界に元日本留学生や研修生がいれば、留学制度への理解や知名度の世論形成にやはり小さからぬ影響を及ぼすことが考えられるからだ。

サイド・プトラ会長は日本への留学は技術者になるためには良いが、政治家になるには向いていないと、苦笑しながら言ったものだ。

「自分も日本で政治家に会う機会はなかったし、また会ったとしても（マレーシアの）政治家になる勉強にはならないよ」。

その通りだろうなあと私も共感。

冒頭で触れたALEPSが仲介役となって開かれた懇親会で、マハティール元首相が述べた日本への要望も興味深いものだ。「NNA ASIA」ニュースによれば、マハティール元首相は日本に留学生を送る意味として「教育による知識を取り入れるだけでなく、日本の文化、バリューシステム（価値システム）を併せて学ぶことが重要」とし、また「マレーシアから日本への留学生の送り込みはコスト面で人数に限界があり、（日本の大学に）進出してもらえれば、留学できない学生も現地で通える」と日本の大学のマレーシア進出への期待も明らかにした。

懇親会で90歳のお祝いにケーキを贈られたというマハティール元首相。大学誘致に熱弁を振るう辺

りはまだまだヤル気十分そうだ。日本の大学の海外進出は私も共感する。ただそれには原資が必要で、それをどうするかは大きな課題だ。また当然ながら、一方的に進出しても成功はおぼつかない。

かつて湾岸カタールを訪れた際に度胆を抜かれたのは、カタール政府が東京ドーム何個分もの広大な砂漠を大学都市に作り替え、全米の大学からそれぞれベストと思われる学部（例えばワシントンのジョージタウン大学は外交官養成学部、シカゴのノースウエスタン大学はジャーナリズム学部等）を誘致し、湾岸・中東地域の子女が学ぶキャンパス計画が進んでいたことだ。

莫大な天然ガスの収入と王室の裁量で何でもできるカタールならではと思う。と同時に日本にはマレーシアが誘致したくなるような魅力ある大学、学部はどれだけあるだろうかとも思う。

また付け加えれば、私は日本の大学は東南アジアに出て行くだけでなく、これからは学生たちも欧米だけでなく、東南アジアにもどんどん留学した方がよいと考える。双方向であるほうが互いの理解は深まる。

## 終わりに

8月23日にはマレーシア元日本留学生協会（JAGAM）の事務所を訪れ、ウィ・チーキョン会長と何人かの会員たちにお会いする機会にも恵まれた。2013年に40周年を祝ったJAGAMはマレーシア全体の元日本留学生の団体で、こちらは華人系が多い。会員は1,300人ほどで女性は約3割という。大学卒業が入会の資格条件だが、これからは枠をもっと広げ、日本との交流だけにこだわらず、マレーシア国内、さらにASEAN諸国の同様の協会との交流をもっとやって行きたいと述べていた。

見方によっては、日本のプレゼンスがそれだけ下がってきたためと言えなくもないが、対日本で固まらず、自分たちの域内にも広がりをもとめると肯定的に考えたい。

また東方政策留学生をめぐるっては、日マ両国の関係者の間で30周年を節目として次は「セカンド・ウエーブの時代」が共通認識のようにになっていた。そのためにもALEPSがこれまでの言わば「ファースト・ウエーブの時代」を文書などに残すことは意味があるし大事なことだろう。

ALEPSやJAGAMなど元日本留学生たちの存在の大きさと役割への期待を私は改めて感じている。